

特集

10年後のぱれっとの
ビジョンを描く・最終回

～合同勉強会から見えてきた
全ての人に共通するテーマ！～

1983年にたまり場ぱれっとがオープンし、創造性豊かな学生や社会人が余暇活動を盛り上げていました。それ以降「発想の転換」の基、おかし屋ぱれっとや株式会社形態でのレストラン事業、グループホーム、クッキーづくりを通してのスリランカ海外支援事業、いこっとなど破竹の勢いで恵比寿地域に活動拠点を増やしていきました。

1990年代半ば、バブル経済が崩壊し人々の暮らしにゆとりが無くなり、とりわけ若者の就職難や長期的な経済停滞に陥りました。ぱれっとも例外ではなく、郊外への大学移転などの理由から学生ボランティア不足がたまり場活動を直撃、一時期事業休止に追い込まれた期間がありました。現場スタッフの中にも心理的閉塞感が漂い、人間関係にも少なからず影響を及ぼしました。若いスタッフやボランティアから「ゆとりがない・豊かな発想が生まれにくい」と嘆きの声が出始めました。「ゆとりは何からくるのか」といったテーマでスタッフ勉強会を行ないました。仕事を一人で抱え込まない、お互い声を掛け合い、心理的安全性を確保できる環境づくりからゆとりが生まれるのだと、今は言えるかもしれません。「お

ぱれっとは本年40周年をむかえました。この先の10年（50周年）を見据えどういった方向で事業展開していくか、一昨年からは理事・ボランティアや父母・職員を交えた勉強会を開いてきました。今月号で今までの話しをまとめていきます。

かしいことはおかしい」と言葉でお互い伝えあえる、「対話」を大事にしてきたぱれっとの理念が常にあります。

●新企画「スタッフどうしお互いを知る」

セクションが増えるとしてもスタッフどうし顔を合わせる機会が少なくなり、特に勤務時間帯が不規則なグループホームの仕事では全体で会議を持つなど、コミュニケーションを取ることが難しい職場です。入職してから他のセクションのスタッフと直接話す機会も持てないまま仕事に従事していることも珍しくはありません。

職員同士話す機会が持てていなかったことを反省し、昨年6月に「受容」というテーマで訓練を目的としたスタッフ勉強会を開きました。「なぜ自分はぱれっとに就いたか」というこの仕事を選んだ理由を一人ひとり話してもらい、相手の意見を素直に受け止め、自分の意見を含まず言葉で相手に返すフィードバックを行ないました。相手が自分の話しを聞いているのだという安心感を持ってもらうこと、受け止め方や丁寧な言葉での返しの大切さを理解し、現場の支援に役立つ勉強会となりました。

●活性化委員会の立ち上げ

定期的に開かれている理事会やばれっと親の会など会議の場が報告のみの場所になってしまっていることが指摘されています。所属メンバーのモチベーションや役割、会そのものの意義など、あまり議論されてこなかったところに会自体を活性化させる目的で委員会を発足させました。それぞれの会における一番の関心事は何か、メンバーにヒアリングやアンケートを行ない、対話を通じて今まで関わってきた疑問や希望など、本音で言える関係づくりから始めました。

親の会の中での優先課題は、本人たちの余暇活動や親亡き後のグループホームでの生活でした。意外にも暮らしの在り方や自立についての意見はあまり出てはいませんでした。10年後のビジョンを描く第1回勉強会を「自立」をテーマにした理由はここにあります。「自立」という言葉が少なかったことが背景としてありました。

理事会も事業活動の報告の場になっていないかと以前から言われています。理事の帰属意識やモチベーションを高めるとともに、理事の役割を明確にすること、理事の強みを生かしたばれっとへの貢献の仕方と現場スタッフとの接点をどう構築していくか、理事会有志による活性化委員会で新たな仕組みづくりを2年にわたって話し合ってきています。

月1回の親の会の持ち方としては、前半は各セクションからの事業報告を行ない、後半はテーマを決めての意見交換ができる

時間とすることにしました。その中で出てきたのが震災時の本人たちの安全をどう確保するかという喫緊の課題でした。親の会からメンバーを募り「震災対策委員会」を立ち上げ、主に通勤時の対応の検討に入りました。GPS機能を駆使した位置情報の確認など、本人たちの安全安心を確保する解決策を考えていく動きの中に、親どうしの活性が生じてくるものと期待しています。

●テーマ「自立」とは

「みなさんは自分らしく生きていますか」生きていく上で究極な問いかけのような気がします。自分らしく生きられているということは、自己実現ができているということではないでしょうか。それは「自立している状態」と言い換えられるかもしれませんが。「自立」とは自己実現を目指すこと、自分らしく豊かな暮らしができていることと勉強会では定義付けられました。人によって自分らしさは様々で、その人にしっかり向き合うことでその人が望む自分らしさが見えてくるような気がします。

「一人ひとりと向き合う」本人が抱く興味関心にどう向き合うか、その向き合い方が支援の在り方を考えることとつながると考えます。

●テーマ「生きやすさ」とは

豊かな暮らしの対極に「生きづらさ」があります。この生きづらさが何からくるのか、本人を取り巻く社会環境や人間関係が起因し、差別や孤立が生きづらさを生んで

いるのではないかと今年1月の勉強会では話し合われました。より多くの人とのつながりや関係づくりから人の豊かさを育てているのではないのでしょうか。生きやすさを求めることは、生きやすい世の中づくりの追求だと考えます。企業・団体・社会資源や人とのつながりを大事にしてきたけれどだからこそ、原点回帰ではありませんが、ぱれっとの理念を再度確認しながら10年後のビジョンにつなげる作業をこれまでの勉強会で行なってきました。

生きやすい世の中にするには障がいがある無しにかかわらず、だれにでも当てはまる取組みと考えます。各々が望む暮らしの在り方の追及は、一人ひとりと丁寧に向き合い対話の中からその人の思いを引出し、地域の中で豊かに暮らせるよう、人と人とのつながり共生社会の実現を目指すところに、ぱれっとの新たな事業展開の方向性があるように考えます。

●居住支援事業「地域共生社会」を考える

障がいの有無にかかわらず一つ屋根の下で共に暮らす「いこっと」において、住宅セーフティネット法に則った居住支援事業に取り組むことは前回のつうしんでお伝えしています。今年から渋谷区では居住支援協議会が発足、ぱれっともそのメンバーに加入しました。一般賃貸住宅と契約することが難しい住宅確保要配慮の方が優先的に入居できるよう、この5月にいこっと8室の内1部屋を専用住宅として登録します。行政から月額4万円の家賃補助を受け、障

がいのある方や高齢者が住み慣れた地域で暮らせるよう、居住支援法人取得も検討に入っています。新規事業を行なうための新たなスタッフを雇用し、いこっとに住む知的に障がいのある人への見守りや自立した地域での暮らしをサポートする役割を担います。企業就労している人など経済的に自立度の高い方が対象となっていますが、家賃補助と生活側面からの見守りの中で入居者増につながる努力をしています。

地域共生社会を目指す居住支援事業は全国的に始まったばかりです。高齢化社会に伴い空き家対策も大きな社会問題となり、行政だけでは解決できない課題に対し、ぱれっとが「暮らしの在り方」を考える上でどう貢献していくか検討していきます。

●「対話」から生まれる共生社会

地域共生社会づくりは一過性のものであってはならず、永続的に行なわなければなりません。「共生」とは、お互いの利益を伴った形での生存を意味し、共生社会のための新たな創生・協働ネットワークづくり等、地域連携を図りながら事業を行なう必要があります。共生社会の姿は、障がいがある無しに関わらず豊かな暮らしの実現に向けた、対話から創生される寄り添う支援の形です。本人が望む生き方・豊かな暮らしの実現のため、ぱれっとが大事にしてきた対話をもとに、当たり前で暮らせる社会の実現に向けたビジョンを描いていきます。

（理事長 相馬 宏昭）